

紹介

水口辰次郎著

丹波山国隊史

山国という名を冠した地名は、丹波の山国村（現京都府北桑田郡京北町の一部）だけらしい。山国村といえば、古くからの禁裏御料であり、江戸時代には京都への材木の供給地でもあった。しかしそれより明治維新のときの山国隊の活躍が有名であろう。

明治維新の性格を知るためには、薩長両藩などのいわゆる討幕諸藩の活躍をあきらかにするだけでは十分ではない。山国隊のような文字通りの「草莽」の兵士たちの活躍の意味も大変重要である。それまで政治の世界にまったく関係させられなかった階層の人たちが、精一杯に活躍したのが維新の変革であるとするならば、山国隊の働きはその縮図であろう。

本書は、そうした山国隊の歴史を精細に叙述している。従来この山国隊について知ろうとすれば、明治三十九年に出版された永井登著『丹波山国隊誌』（本書に付録として収載）がほとんど唯一のものであった

が、本書は、地元出身の著者（東京高師の卒業で、刊行の直前に八十二歳で永眠された由）が、地元に残された史料（隊員盟書・山国隊日記・征東日誌など）を駆使されて著述されたものだ。だが本書は、地方史関係の書物にありがちな地元の史料だけで叙述するのではなく、維新史の基本文献にもよく精通されて、全体の維新史のなかに山国隊の活躍を位置づけようと努力されている点は特筆する必要がある。

それにもう一つの特筆される点は、空間的なひろがりだけでなく時間的なひろがりのなかで山国隊史が書かれていることである。古代以来の山国村の歴史を、「第一編 山国隊前史」として「第二編 山国隊本史」の前においている。山国隊が活躍する歴史的な背景をあきらかにしようとしておられるのだ。それに「第三編 山国隊後史」まで用意されている。そのなかのエピソード一つ。山国隊の行動費は全て自前であったが、同隊は便宜上鳥取藩に付属したので、その費用のための借財四千二百五十両の大半を同藩から借用していた。

だが読んでいて不満がないわけではない。一つは、一般史の叙述がいささか繁にわた

りすぎてはいはないかということであり、もう一つは隊員個々人の働きやその村での状態などをもう少し具体的に書いてほしかったということである。

ともあれ詳細な年表まで付せられた本書は、これから山国隊について知ろうとすれば、まず第一に読まなければならない書物になることは間違いない。

（A5版 本文九四〇頁 付録行動年表史料 等一五〇頁 昭和四十一年四月 京都府北桑田郡京北町山国護国神社刊）

（池田敬正）

狭山町史 第二巻 史料編

河内狭山は狭山池の名とともに歴史家にとって印象深い地名である。狭山池は早く崇神六二年紀、垂仁紀にみえる伝承の池である。元禄には水下七五カ村四万七千石の地を灌漑していて、河内の農村に欠くことのできないものであった。また秀吉の小田原攻めによって減じた関東の雄北条氏が、ここで万石余を許され、名家の余流をたもっていた。その近世における歴史は、畿内小藩の典型ともいふべきものであり、苦闘

の末は、維新に際して、明治政府の廢藩を
またずに藩をやめたことでも知られている。

この狭山において町史編纂がおこなわれ
ることを聞いてから、かなり久しい年月が
たっており、私共はその上梓の日を鶴首し
ていたのであるが、昨年、まず第二巻史料
編を刊行された。末永雅雄、井上薫、山口
之夫、福島雅藏の諸氏が編纂にあたられた
にふさわしいすぐれた史料集が世に送りだ
されたことを喜び、若干、内容を紹介した
いと考える。

本文の史料は二六五点、五一四頁、古代、
中世、近世、近代の三部にわけ、とくに史
料の豊富な近世については、総記、土地、
貢租、村政、戸口、水利、土木、産業、狭
山藩、狭山藩領、寺社、銘記の一二項にわ
かって、主要な史料を採録されている。こ
れらは、いずれも興味深いものであるが、
なかでも「中林家累代日記」（総記）は、
文明二年（明治十年）とあり、ここでは天正
十一年より収載されていて簡単な記述であ
るが注目すべきものが多い。明細帳は六カ
村のそれが収められ、内容は詳細である。
「村政」では、摂河泉地方に多発した村役
人不帰依一件文書が含まれ、「水利」「土

木」では狭山池関係の注目すべき史料があ
り、産業には菜種油絞業、天満青物市関係
のものがある。また「狭山藩」では税斂法
とある貢租収納に関する詳細な文書や狭山
藩公辺諸向手控、旧狭山藩記事書類などが
収められている。

したがって、本史料集は、近世における
最も先進的な商品生産地帯の情況を知る上
での重要な参考文献となるであろうし、ま
た狭山池用水の慣行や、畿内小藩としての
狭山藩藩政を研究するのに、すぐれた手が
かりを与えるものと考える。

なお、本書には、本文につづいて一〇七
項におよぶ図版が付け加えられている。こ
こに含まれた数百枚の写真は、いずれも鮮
明なものであり、考古学遺物、古文書、民
俗行事、産業資料、景観など、多種多方面
にわたっている。それは町の歴史をより身
近のものとしており、本書の特色としてあ
げることができよう。

関係者の御努力に敬意を表し、狭山町史
第一巻本文編の刊行の早からんことを期待
しつつ簡単な紹介の筆をおきたい。

（A5判本文五一四頁 図版一〇七 昭和四
十二年四月 狭山町刊）（脇田 修）

箕面市史 第一・二巻

北摂の中央に位置する箕面市は旧箕面
村・萱野村・豊川村・止々呂美村などを母
体として成立し、市域には膨大な史料を有
する応頂山勝尾寺があるところから、市史
の編纂が早くからのでまわっていた。昭和三
九年暮に古代・中世篇として第一巻がま
まり、昨年近世篇の第二巻が出された。

第一巻は第一章原始・古代の箕面のうち、
主として考古学的面を藤沢一夫氏、文献学
的面を末中哲夫氏が担当し、第二章中世の
箕面のうち勝尾寺文書を中心とした中世全
体の動きを戸田芳実氏、文化財の面を佐和
隆研・藤井直正・藤沢一夫諸氏が分担して
いる。原始・古代の遺跡・遺物については
箕面市域のものが網羅してあるほか、周辺
のそれについても関連的にとりあげられて
いるので、北摂全体の様子を知る上で便な
らしめている。三〇〇頁にのぼる中世の政
治・社会・経済史は、ほとんど勝尾寺文書
によっており、本巻の中心部分といってい
いだろう。同文書の豊富なことは記述に便
利である反面、とすれば史料利にかたよ